
コラム 鎌倉法華堂の源頼朝画像

現存する源頼朝像については旧著『源頼朝像 沈黙の肖像画』のコラム「さまざまなく頼朝＞像」でいくつかの作品を紹介したが、黒田日出男氏の『源頼朝の真像』（角川選書 490 角川学芸出版 2011）に現在確認できる事例がほぼ紹介し尽くされている。ここでは落ち穂拾いの的にいくつかのことについてふれておきたい。

あまり知られていないが、源頼朝の肖像画は13世紀に存在していた。場所は鎌倉、頼朝が亡くなって一周忌の仏事が営まれた法華堂である。この頼朝一周忌仏事を記す『吾妻鏡』正治2年（1200）正月13日条には頼朝画像の記述はない。その後、頼朝の追善仏事はしばしば行われていた記録が確認できるが（2022：竹ヶ原康弘『鎌倉殿祭祀の歴史的研究 ― 鎌倉幕府の種軍と家政』 和泉書院）、肖像画についての言及はない。

その後、執権北条氏と鎌倉将軍有力御家人の三浦氏の対立によって引き起こされた宝治の乱で両軍が武力衝突、敗色濃い三浦氏一族が頼朝の影前で最後をむかえようと法華堂に籠もった。軍の乱入に驚いた同堂の法師はあわてて天井に身を潜め、籠もった面々の言談を天井の隙間から見守り聞き耳をたてた。この法師の供述が『吾妻鏡』宝治元年（1247）6月8日条に記されている。それによると三浦氏軍の急先鋒であった三浦光村が敵軍に光村の顔と判別できないよう自ら刀で自分の顔を傷つけようとするが、その流血が頼朝像を穢してしまうからやめろと忠告されたという。この源頼朝像がいつ法華堂に奉納されたのか、また宝治の乱後どうなったかはつきりとは分からない。

本文でふれたように「神護寺略記」に記される源頼朝像は、彼の生前の肖像で、おそらく後白河院のもとにあった似絵の中の1枚であろうと思われる。これらの似絵は後白河院周辺の人物のスナップ写真とでもいうべきものである。さらに14世紀に入って甲斐善光寺の源頼朝坐像（彫像）がある。これも黒田日出男氏の前掲書に詳しい。なお当像は近年修復され、欠損していた玉眼がはめ込まれた。かつて実見した際、頭部が体軀部にすっぽりと嵌っていたが、修理によって直ったらしい。現在では13世紀制作の頭部を、源頼朝像であることを記す胎内銘のある体軀部（文保3年1319 銘）に据えたと理解されているが、なぜ首の部分が合わなくなったのだろうか。

肖像彫刻の場合、顔貌は像主の顔のスケッチ（紙形）をもとに制作されるが、頭部が頼朝の紙形から写されたとするならば、この下絵がどこかに残っているかもしれない。法華堂の頼朝像の下絵ともども画像制作に伴う紙形ないしはその写しが、いつか出現するかも

しれないと淡い期待を抱いている。

なお売立目録に以下の源頼朝画像が確認できることを中村節子氏より教えられた。

- ・大正13年（1924）武藤山治氏第二回
7 源頼朝像神護寺寫 豎四尺三寸二分 巾二尺五寸
- ・大正15年（1926）故古郷精翁居士遺愛品
17 古画 頼朝公像 豎四尺二寸 巾二尺八寸三分
- ・昭和13年（1938）伊藤平山堂
273 木彫傳頼朝公像 春日台添 九寸五分

氏は東京文化財研究所「売立目録デジタル・アーカイブ」の実質的な制作者であり、その成果の詳細については以下のホームページを参照されたい。

<https://www.tobunken.go.jp/japanese/uritate.html>